

# 台湾生活から考えさせられた日本と台湾

## — 外国の文化・歴史・風俗 —

前台北日本人学校 教諭

群馬県前橋市立若宮小学校 教諭 田中規王

キーワード：現地理解，外国の文化・歴史・風俗

### 1. 調査・研究のねらい・目的

来台してすぐ感じたことは、台湾の人々が親日的であることである。その理由を追究・理解し歴史を学び、日本人としての自分のあり方を探る。

### 2. 調査・研究の結果

赴任前に私がイメージしていた台湾は、親日、グルメ・・・。

来台して実際生活してみると、私が思い描いていた以上に街には活気があり、親切な人が多く、とてもおいしい食べ物に驚いた。また、それだけではなく、おそらく歴史的背景にもとづく台湾のもつ奥深さにも気づかされた。

台湾に来て、早四年、その間、数々の出会いの中で特に印象的であった台湾の方との出会いを紹介したい。

まず初めは、お隣に住む年輩のご夫婦との出会い。ご主人は外科のお医者さんで、数年前に引退されたとのこと。驚いたことにその方は、私たち以上に日本人らしいのである。流暢な日本語はもちろんのこと、読書はすべて日本語で書かれた日本の本、時々聞こえてくる曲は日本の演歌、いつも見ているTV番組は「NHKのど自慢」や「NHKニュース」、「大相撲」「甲子園」「日本シリーズ」も毎回楽しみにしている。先日、お宅におじゃました際に冷蔵庫から取り出したビールも「キリン一番搾り」。さらに驚いたことには、同窓会での会話はいまだに日本語だそうだ。そのような理由から、我が家の子どもたちは、今でも日本人のおじいちゃんおばあちゃんだと信じて疑わない。家族ぐるみでお付き合いさせていただき、大変お世話になっている。

二人目は、「二二八纪念馆」の見学に行った際に、お世話になった日本語ボランティアの方との出会い。その方は、自ら志願し日本兵として出兵した経験の持ち主であった。約二時間にもおよぶ熱心なお話の中で、日本統治時代を振り返りながら、「なぜ日本兵に志願したのか」等、自らの貴重な経験を語ってくれた。彼は、当時の日本統治時代の素晴らしさ、当時の日本人の正義感、勇気、真面目さを絶賛するとともに、当時の日本教育を受けたことを誇りにさえ思っていた。その翌日もまた、その方のお世話になり「総統府」の見学をさせていただいた。帰り際にその方が私に向けておっしゃった「しっかり歴史を学んで欲しい」「日本人の若者にはぜひ自信をもってがんばって欲しい」、この言葉は私の胸に重く響いた。

お二方とも日本のことを心から好きでいてくれる気持ちが伝わってきて大変嬉しく思う反面、台湾と日本との歴史的な背景を考えると複雑な思いも否めない。このような大きな視野で物事を考えると、私が今まで日本で暮らしてきた三十有余年、ただただ目の前のことだけに励んできたような気がしてならない。しかし、このお二方との出会いによって「日本」「日本人」「世界」「自分」を見つめ直すきっかけを与えられたことに心から感謝している。こ



▲ 総統府見学でお世話になった日本語ボランティアの方と

れからも、現地の方々との交流を通して現地理解を深めるとともに、その経験を今後の教育活動に活かしていきたいと考えている。

ここからは、日本統治時代を経験されていない自分と同年代の方との出会いを紹介したい。

赴任一年目、私の住まいを修理に来てくれた方との出会い。幸か不幸か、我が家は住み始めた当初からあちこち修理が必要な家であった。初めのうちは、こちらも「ニイハオ」「シエシエ」しかしゃべれず、警戒心のかたまり。何度目かからは『旅の指し会話帳 台湾』という本を片手に悪戦苦闘。そのうち、先方が修理の際に奥さん同伴でいらっしゃるようになり、我が家の人なつっこいだけがとりえの娘たちのおかげもあってか、お互いにだんだんと打ち解けていった。赴任一年目の旧正月のこと。お昼にその方の家に招かれ、手作りのごちそうを食べさせていただいた。それどころか、わけのわからぬまま、夜は奥さんのご実家に連れて行かれ……。そこには、お年寄りから子どもまで親戚中が集まっていた。とにかくたくさんの料理にお酒。突然おじゃまして恐縮している我々に対する熱烈な歓迎ぶり。そのパワーに圧倒され、失礼のないよう注がれたお酒はすべて飲み干し……。「明日はうちにおいで。約束よ」と弟のお嫁さんのお母さん。「冗談でしょ」と聞き流していたその翌日、昨日の興奮も冷めやまぬ中、本当に招かれた。そこでもまた、たくさんに振る舞っていただいた。台湾語・北京語・日本語が入り交じったすごい状況であったが、すっかりお世話になってしまった。この時以来、私はお酒を飲むと「フォーリン」おいしいものを食べると「フォーチャ」と台湾語を使うようになった。親戚中が集まり料理を囲み新年を祝って大騒ぎ。父や母、親戚と遠く離れて台湾生活を送っている私にとって、なんだか懐かしい正月の雰囲気を思い出させてくれる時間であった。來台して十ヶ月で私たち家族が感じたことは、「言葉が通じなくても一緒に楽しむ心があれば身振り手振りでもういかなる」「心は通じ合う」ということである。まさに、忘れることのできない貴重な体験であった。

次は、四年目の八月。家族で金門島二泊三日の現地ツアーに参加した時のこと。もちろん日本人は私たち家族四人だけであった。そこで知り合った家族とも、旅行中、毎食同じ円卓を囲むなかでだんだんと打ち解けていった。そのご家族は親族八人でツアーに参加されていて、うちの娘と同じくらいの子どもがいた。子ども同士はすぐに仲良くなり楽しい国際交流の旅となった。それだけではない。なんと旅行最終日にその方が、うちの娘に「せっかく仲良くなったのだから、今日はぜひうちに泊まりに来てね」というのだ。気持ちはありがたいのだが、いくら親切な人とはわかっていても、知り合ったばかりの台湾の方だし、その方の家は、台北から高速道路で一時間かかる距離にあった。最初は「冗談でしょ」と本気にしていなかったが、どうやら本気のようなのであった。結局、その場の盛り上がった雰囲気に流され、その家庭に子どもを泊めていただくことになった。翌日の夜、娘二人はBMWのオープンカーで送っていただき、満足した様子で帰宅した。こんなことは日本でもありえないことだ。親として少し反省する面もあるが、とにかく娘二人にとって最高の国際交流ができたようだ。

ここに挙げた体験は、ほんの一例に過ぎない。今振り返ると、台湾社会にどっぷり漬かった四年間であった。風邪をひくたびにお世話になったお医者さん、習い事の先生たち、たびたび通った小さな食堂のおじちゃん、おばちゃん、市場のお肉屋さん、美容師さん、パン屋さん、自転車屋さん……。帰国の挨拶をしたい台湾の方々があるくさんいる。そして、私は思った。「台湾の方たちは、どうしてこんなに我々に親切にしてくれるのだろう」。私が日本に暮らしている時を思い出しても、これほどまでに外国人のことを考えたことはなかった。台湾で生活し、台湾の方たちが我々（日本人）に対し、心から親切にしてくださったことを私は一生忘れない。台湾は私にとって第二の故郷となった。帰国後も、世界の中には日本や日本人に対してこんなにも親切にくださる方たちがいることを忘れず、機会があるごとに台湾について紹介し、日本と台湾の架け橋になろうと考えている。

## 台北日本人学校の概要

台北日本人学校は、台湾の中心都市である台北市にあり、全校児童生徒は732名（平成19年2月現在）。在外日本人学校としては、比較的大きな規模の学校である。学級数は、小学部が一学年3クラスずつ、中学部は一学年2クラスずつとなっている。本校の特徴としては、両親のうちのどちらかが日本国籍ではなく2つの国籍を持っている子どもたちが約3割を占めていることが挙げられる。そのため、特に低学年においては、中国語の方が得意であるという子もいる。また、年間の編入・退学が200名ほどになる、大変入れ替わりの激しい学校である。特色ある教育活動としては、小学部1年生から6年生までを対象とした、総合の時間を使っての「中国語」、「英語活動（英会話）」（ともに習熟度別）および「現地校との交流活動」がある。



▲ 国際ドラゴンボート大会に出場する台北日本人学校チーム